

# チェルノブイリ通信

<http://www.cher9.to/tusin.html>

NPO法人  
チェルノブイリ医療支援ネットワーク  
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F  
TEL/FAX: 092-260-3989  
E-mail: [jimu@cher9.org](mailto:jimu@cher9.org)



チェルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.  
**109**

## 特集:2017年秋・ベラルーシ訪問レポート

### CONTENTS

十八年間にわたる医療支援に参加して / チェルノブイリ原発事故国際会議参加について / 甲状腺検診報告書 / 支援先の医療機関紹介 / チャリティーコンサート&講演会のご案内 / ミンスクの一日 / 支援者のお名前とメッセージ / 事務局からのおしらせ / 編集後記



ミンスクの中心地ゴーリキ公園内

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？  
ご寄付を受け付けています。

郵便振替口座 01770-1-65328  
楽天銀行 ジャズ支店(支店番号201) (普) 7017104  
住信SBIネット銀行 法人第一支店(支店番号106) (普) 1030416



本紙はCMNの活動を支援してくださっている皆さまへお届けしています。また団体ウェブサイトでもPDFファイルにてご覧いただけます。送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

寄稿

# 十八年間にわたる医療支援に参加して

金地病院名誉院長・清水一雄

## はじめに

平成29年9月16日から23日まで第38回ベラルーシ訪問に帯同しました。今回のメンバーは河上雅夫理事、山田英雄医療顧問、千葉百子順天堂大学客員教授、木村真三獨協医科大学国際疫学研究室准教授と私(写真①)のほか、現地で通訳として田中仁君が加わり計6人で医療支援活動を行いました。私はブレストと、ミンスクでの国際シンポジウムで2回の講演を行いました。が予定されていた甲状腺内視鏡手術は先方の都合から中止になり現地外科医の実力の向上を見ることが出来ず、更に改良工夫した私の技術を紹介することが出来ずとても残念でした。

私は1999年にはじめてこの検診に参加させていただいて以来18回目の訪問となりました。当初はスーリン地区での検診から始まり、2002年からブレスト市に展開する医療支援活動に参加させていただいています。1999年の初参加の時の衝撃は今でも忘れません。三日間で83人の受験者の検診を行い68

人に細胞診を行いました。その中で癌の疑いが7人、強く疑うが5人でこの12人に手術を勧めています。このうち5人が実際に手術を受けましたが驚くことにこの5人中4人はチエルノブイリ原発による被曝時年齢が15歳以下の小児でその年齢は12歳、6歳、1歳と0歳でした(次頁図参照)。このような症例経験のなかった私は驚きと共に事故後13年経たこの時期でも被曝の影響かもしれないという事実を目の当たりにすることになりました。この経験が今までこの活動に参加し続けてこられたエネルギーの一つになっていると思っています。

この間、参加当初にお会いした矢野宏和元理事長、津島朋憲元理事から始まり、三島さと子元事務員、川原秀之事務局長、福岡由紀子さん、中山(旧姓寺嶋)悠現理事長のお世話になりながら今まで大変貴重な経験をさせて頂いてきたことも継続の源となっています。特に、山田英雄医療顧問とは初回から現在



チェルノブイリ原発事故(1986年)前後11年間における  
ベラルーシでの甲状腺癌発生数の比較

期間	総数	成人	15歳以下の 小児
事故前	1354	1347	7
事故後 (1986-96)	4514 (3.33倍)	4006 (2.97倍)	508 (72.6倍)

(Yuri Demidchikuより提供)

まで常に一緒に何かから何まで助けていただいております。感謝しております。加えて、これらの方々の弛まぬ努力、ご尽力とこの活動を理解し支援していただいている多くの方々の力がなければ活動自体を現在まで続けることは不可能であったとも思っています。また、私の在職していた日本医科大学の多数の学生、研修医たちが自費で参加し大変貴重な経験と共に医療に対する人道的見地からのモチベーションを強く持ち、持続し、患者さんにやさしい立派な医師となつていることもご報告させていただき改めて御礼を申し上げます(同②)。

## 二日かけてブレストへ

さて、今回のベラルーシ訪問につきご報告をさせていただきます。今回のベラルーシ訪問につきご報告をさせていただきます。

9月16日(土曜日)、モスクワ経由で夕方、日没後ミンスク空港に到着。ミンスク空港は最近行くたびに様変わりしていますが、近年、ミンスク市で世界アイスホッケー選手権大会が開催されたことにより当初の小規模な空港は空港内施設も含めて大変立派になっていました。ここでまず今まで常に迎えに来てくれているベラルーシ赤十字職員の姿が無く、タクシード市内のホテルまで移動という今回の訪問に関して不安を招く状況から活動が始まりました。

翌17日の日曜日は、列車で6時間近くかけてブレスト市へ移動。ここではいつものように、アルツール医

師、ウラジミール医師が迎えに来てくれており再会を喜び合い、空港で少し抱いた不安が解消されました。いつものホテル、インツォリストへチェックイン。移動二日を要し一気に現地入りとなりました。

## 表敬訪問と意見交換

18日(月)、まずブレスト州立内分泌診療所のアルツール・グリゴロビッチ所長を表敬訪問、ミーティングを行っています。診療所受付にはベラルーシと日本の国旗が掲げられておりました(同③)。これはなぜかと聞くと私たちの歓迎と今までの活動に対する感謝、そして東日本大震災による福島原発事故による被災者へのお見舞いのしるしであると言っておりました。アルツール医師のオフィスでのディスカッションの内



容は大変貴重なもので最近のベラルーシ、ブレストにおける医療問題、糖尿病の発症と治療、この疾患の社会的問題、甲状腺癌の検診状況、ブレスト市民、140万人の中の10年間の甲状腺癌発症状況、ブレスト診療所で扱っている稀な内分泌疾患ついてなどの意見交換を行いました。

私にとっては新しい情報も多く大変興味深いものでした。このような貴重な情報を惜しげもなく提供してもらえるのは今までの医療支援ネットワークの弛まぬ努力、誠意に基づく信頼関係によるものであることを強く感じました。

### 悪性腫瘍病院の視察とシンポジウム

翌、19日(火)は、ブレスト州立悪性腫瘍病院を訪問視察。2年前に新しくなった病院内を案内していただき、放射線核医学診断治療室、CT、MRI検査機器類、病室(大部屋、個室)、手術室などを見せていただきました。手術室前は自然光が入るガラス張りになっており手術室内は広く明るく病院自体の暗いイメージはなく仕事がとてもしやすそうな印象でした(同④)。午後は、最初のシンポジウムで病院の講堂にて1999年から今までの私の活動内容と福島原発事故後の小児甲状腺癌検診の現況につき獨協医科大学国際疫学研究室の木村真三准教授と私が

山田さんの通訳で最初の講演を行っています(同⑤)。聴講する医師たちの真剣な眼差し、若い医師との質疑応答を通して彼らが福島事故と小児甲状腺癌発症に関心を持っていることを実感しました。

### ミンスクでの表敬訪問

20日(水)は再び列車でブレスト市からミンスク市へ移動。

21日(木)午前、例年通り日本大使館を表敬訪問、徳永博基在ベラルーシ共和国日本国大使と面会、ベラルーシでの活動の現況、将来展望などにつき実り多い話し合いが行われました(同⑥)。引き続き、これも例年通りベラルーシ赤十字社を表敬訪問。ここでは総裁が不在で(入院中とのこと)、対応に出てきたのは代理の方。いつも空港に迎えに来てくれて、ミンスクでの移動に携わっている二人のドライバーはどちらも夏休みでないとのことでした。

### 医学再教育アカデミーでの国際会議

午後はベラルーシ医学再教育アカデミーで二回目のシンポジウムが開催されました(同⑦)。獨協医科大学の木村真三先生による「福島原発事故後放射能汚染」に関する詳細な調査結果の報告、順天堂大



学客員教授の千葉百子先生の「アラル海における人類の健康に与える二十世紀最大の環境破壊」のテーマでの講演、そして私の今まで経験してきたベラルーシにおける甲状腺内視鏡手術導入までの苦労を含めた医療支援医療の内容に加え福島原発事故後の我が国での対応、18歳以下38万人の被災者に対する小児甲状腺癌大規模検診の現状と今後の展望につき田中仁君の通訳で詳細な報告をしました。ここでも会場のメインテーブルには両国の友好を示すベラルーシと日本国旗がおかれていました(同⑧、⑨)。またアルツール医師をはじめ現地ベラルーシ医師によるチェルノブイリ事故と甲状腺がんに関する5人の発

表もあり大変内容の充実したシンポジウムとなりました。嬉しかったのは数年前私の所属していた日本医科大学内分外科に甲状腺内視鏡手術の習得のため3か月の短期留学に来たセルゲイ医師が自ら行った7例の内視鏡手術の報告をしたことです(同⑩)。着実に現地で本術式が普及されていると実感しました。夕方は、あのリューダが娘のアンナと共に宿泊ホテルを訪れてくれて再会を喜び合い(同⑪)、我々と夕食を共にして楽しいひと時を過ごすことが出来ました。こうしてすべての日程をつつがなく終え、翌22日

(金)にミンスクを经ちモスクワ経由で23日(土)無事帰国しました。今回のベラルーシ行きは、予定されていた手術が双方の都合で中止になったこと、ミンスクでの移動、表敬訪問時のベラルーシ赤十字社の対応がすこし不備であったことなどもありましたがそれらのでき事なかったようにいつも会う現地医師、病院関係の方々とは、今までと変わらず親しく交流し、情報交換などを行い、ベラルーシとNPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワークの関係はとも良く今後も医療面のみならず人間的信頼関係、友情などさらに良好に発展していくものと感じました。



●報告● ウクライナ・キエフアカデミー小児産婦人科研究所訪問

# チェルノブイリ原発事故国際会議参加について

島根大学医学部総合医療学・野宗 義博



## はじめに

チェルノブイリ原発事故後30年経過し、最近やっと巨大な石棺で放射能活動している事故現場をカバーし、さらなる周辺への被曝汚染の拡散が防衛されました。現在、ウクライナとロシアの国境地帯は戦争状態にあり放射線被曝の医学研究への関心も予算も制限されてきています。しかしながら、事故後30年経過した現在でも、小児の奇形、流産等も減少なく小児産婦人科のタマラ教授はなんらかの放射線被曝の影響を否定できないため、更なる調査を島根大学医学部との共同で研究を依頼されたので今回我々は現地の状況を見るために同研究所を訪れた。

## 問題点

1)放射線被曝の影響はまだ完全に説明されていないし、皆無ともいえない。この事は福島原発事故後の健康被害の解明にも関連するであろう。

2)また、ウクライナという国の国情はロシアとの和平が成立していないため、軍需費の高騰のせいで十分な医学研究・最新医学治療が進んでいない。

チェルノブイリ原発事故後30年経過した現在、なお種々の健康問題がウクライナで発見されていて、このことは福島原発事故後の我が国の国民の健康影響を調査する上で重要な指標となるでしょう。

その為ウクライナのキエフアカデミー小児産婦人科研究所と島根大学医学部との基礎的・臨床的被曝の共同研究が可能になれば両国にとつても重要な成果をあげるものと信じます。

## 日程表

2017年5月14日(日)

羽田空港を出发、現地時間の14日夜にキエフ到着

2017年5月15日(月)

チェルノブイリ原発事故現場での放射線測定

1)キエフから80キロ離れた事故現場へのツアーバスにて事故後30年目の現地の状況調査



② 事故現場より30キロ、10キロ、中心地での残留放射線の測定

2017年5月16日(火)

チェルノブイリ国際シンポジウム参加

キエフアカデミー小児産婦人科研究室講堂にて今回我々の経験を発表。参加者は同研究所の医師、看護師、検査技師、研修医等約50名。

発表内容:

① 井上教授(高知医大)による福島原発と日本人の自殺の関係を発表

② 星教授(広島大学)による低線量被曝動物実験のデータを発表

③ 野宗義博(島根大学)福島原発事故後6年目の福島県内での小児甲状腺がんの発生について発表



廃墟の町 チェルノブイリの病院跡



廃墟の遊園地 プリピャチ



キエフアカデミー小児婦人科病院にて



全身放射線カウンター

④ 武市教授(武市クリニック院長)による広島原発と甲状腺がんの関連を発表

今回は日程の都合により、キエフアカデミーからの発表はなかった。

2017年5月17日(水)

チェルニゴフ第2病院表敬訪問

キエフから120キロ離れたロシアとの国境に近い村を3年ぶりに訪問。ここは20年前から広島大学として住民の甲状腺検診を行っていた村です。現在、院長も代わり今後島根大学との共同研究ができるかどうか訪問した。現地では地方のTV局も取材に来ていて、福島原発の現在の健康被害への質問がなされた。今後、住民の健康調査を小児産婦人科研究所のタマー

ラ教授、オルガ医師と共同でしていくことになった。

2017年5月18日(木) キエフへ車で移動後出国

2017年5月19日(金) 羽田空港着

### 同行者

星 正治

／広島大学名誉教授・島根大学医学部臨床教授

井上 顕

／高知大学医学部公衆衛生学教授

武市 宣雄

／広島甲状腺クリニック院長・島根大学医学部臨床教授

以上ご報告いたします。

● 寄稿 ● これからの医療を担う若者が被災地で見たこと、感じたこと

島根大学・野宗義博先生の関東での甲状腺検診に同行された伊豆原さんに報告を寄せていただきました。

# 甲状腺検診報告書

「医師の技術と言葉で、受診者に安心感をあたえる取り組み」

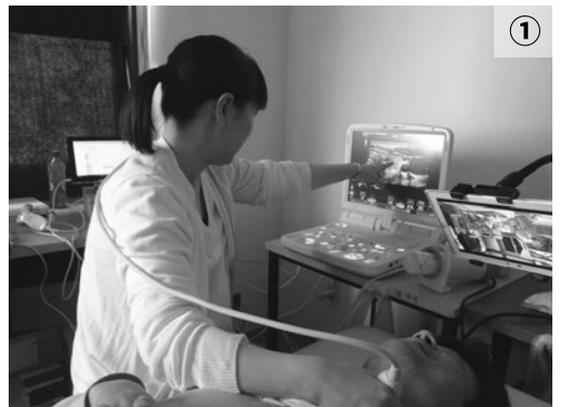
島根大学医学部医学科6年 伊豆原 久枝

この度は、野宗先生にお誘い頂き、神奈川県での甲状腺検診に同行させて頂きました。福島と神奈川は離れていますが、福島の原発から漏れ出た放射性物質が風に乗って関東まで達したとの予測があり、関東圏にお住まいの方は当時不安な日々を過ごされたと思います。今回の検診では、主に小児を対象とし、保護者の方も希望されれば受けられるものでした。私自身も、検査技師の方や医師の方のご指導の下、来られた方にエコーをさせて頂きました(写真①)。

他に、保護者の方にエコーの見方を説明したり、震災当時にどこにおられたか、どのような状況だったか、特に心配なことはないかを聞いていました。東北大震災から6年が経ちますが、保護者の方や一部大きなお子さんは当時のことを鮮明に覚えておられ、そのときの状況や不安な点について話してくださいま

した。直接お話を伺う事ができ、放射能に対する不安を肌で感じる事が出来ました。

検診が終わったあとは、野宗先生によるエコーのポイントのレクチャーがありました(写真②)。甲状腺エコーの基本的な知識を始め、エコーを行った際、何とも判断したい典型的な結節像でなかった場合に、その後のフォローアップをどうしたらいいかななどを相談する場がありました。検診を行うだけでなく、意見交換の時間を作り知識を深め合い、よりよい検診にしていく取り組みだと思いました。小児の甲状腺検診に関する情報は少なく手探りである部分もあるため、このような時間があることは心強く感じました。放射性物質は目に見える物ではありません。身体への影響も、はっきりと目に見えるとは限りません。目



に見えない分、放射性物質に関して心配される方々の不安は大きいのではないかと推測します。今回の検診の間、保護者の方やお子さんとお話す機会がありましたが、前回の検診と変わらなさと分かれるとほっとした表情になり、安心しましたと話して帰って行かれました。この様子を見て、この検診があつて本当によかつたと思えました。また1年後の様子を見せて下さいねと次の検診の約束をすることでさらに安心感を与えられるのではないかと思います。

一方で、放射性物質への危機感の薄れも感じました。検診の間はひっきりなしに子供達やそのお母さん、お父さんが検査を受けて行かれたように思いま

たが、スタッフの方々にお話を伺うと、検診が始まった頃はもつと来られる方の数は多かつたとのことでした。東北大震災から6年の歳月が経とうとしています。この歳月の間に、震災の記憶が風化し、危機感が薄れてきたという事でしょうか。

今回はこのような素晴らしい取り組みをされている場に行かせていただき、貴重な経験をさせて頂きました。検診に取り組みされている医師の方をはじめ、検査技師の方やスタッフの皆様の努力は凄まじいものがあり、検診を続けて行くには相当なエネルギーが必要なのではないかと感じました。今回得られた経験を将来医師となったとき生かしていけるよう、日々精進していこうと思います。この度は甲状腺検診に同行させて頂きありがとうございます。

## 2017年秋ベラルーシ訪問 支援金・支援物資

会員・支援者の皆さまからの温かいご支援で、今年もチエルノブイリ原発事故被災地へ支援を届けることができましたので、ご報告します。

### ●ベラルーシ赤十字

検診車「雪だるま2号」維持費・1500ドル

### ●ミンスク10番病院

医療器材等購入費・1000ドル

### ●プレスト州立内分泌診療所

医療器材等購入費・2000ドル

スライドグラス（甲状腺検診用・消耗器具）・6キロ

カブラゴム（超音波診断装置の消耗部品）・4個

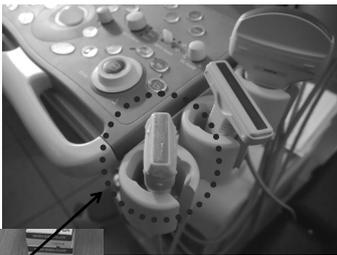
ダーマトグラフ／赤（甲状腺検診用の色鉛筆）・30本

### ●ローカルNGOコンフィデンス

活動支援費・900ドル



受領証にサインするアルツール所長  
(プレスト州立内分泌診療所にて)



カブラゴム



スライドグラスは、武藤化学(株)さまより無償提供していただきました。誠にありがとうございます。



注射器で採取した甲状腺の細胞の検体を作ります



# ブレスト州立内分泌診療所

通信102号に続く第2回目は、ブレスト州立内分泌診療所です。今回は診療所から発行されているパンフレットを田中仁さんが翻訳、山田英雄さんが監修のうえ、CMN理事・河上がまとめました。

## ブレスト州立内分泌診療所の歴史

はじめて正式に内分泌系の病気がブレストで記録されたのは1926年のことです。当時、2人のバセドウ病の患者、3人の糖尿病患者が確認され、最初の内分泌薬品の使用が記録されています。1951年にブレスト中央病院で内科医による患者診察が始まります。

1959年、ブレスト州立甲状腺腫診療所が現在のブレスト市立病院の建物の中に設立されます。所長はA.G.イバノヴァさん(女性)でした。当時は100人もの糖尿病患者がいて、そのうちの44人が初めて発見された人達でした。73人の患者にはインシュリンを投与していました。1960年にレヴァノフスキー通りに場所を移しています。

1969年に診療所はミツケーヴィッチ通りに場所を変えました。その時の所長がソビエト・ペラルーシの名誉博士でもあるスタニスラフ・イヴァノヴィッチ・ミツケーヴィッチ氏です。彼はブレスト州の内分泌学発展に多大な貢献をしたドクターで、新し

い甲状腺診断法、ブドウ糖・血糖値の算定方法を導入し、20の医学論文を発表しました。1979年に診療所はブレスト州立悪性腫瘍病院の建物の一面に場所を移しました。

1996年からこのブレスト州立内分泌診療所に糖尿病予防診療室が設けられます。この診療室はその効果を認められ、2004年にブレスト市立中央病院に組み込まれました。

1997年にはブレスト州立内分泌診療所の移動診療ラボが国際赤十字赤新月社国際連盟の協力のもと創設されました。この移動検診はチエルノブイリ事故後の甲状腺疾患のスクリーニング実施を施し、2013年までに放射性ヨード汚染地域の24万8千人もの検診をしました。2016年7月1日、工事中だったブレスト州立内分泌診療所が新しくソビエツカヤ・コンステイタチャ

通りにオープンしました。

## アルツールさんとお父さんについて

1982年にスタニスラフ・マトベーヴィッチ・グリゴローヴィッチ氏(アルツールさんの父)がブレスト州立内分泌診療所所長に就任します。スタニスラフ・グリゴローヴィッチさんは初めて内分泌学者の医師としての資格を1978年に取得し、1984年にはその分野での最高資格を取得します。さらに彼は(救急内分



矢野元理事長のインタビューを受けるアルツール医師のお父さん



改装中の内分泌診療所



改装後の側面



改装後の内部

泌症状教授法」という参考書を書き上げ、それは内分泌専門医師・専門家の間で高く評価され、実際の医療現場でも取り入れられます。スタニスラフ・グリゴロヴィッチ所長時代のプレスト州立内分泌診療所には予防と治療の最新教授法が導入されます。例えば、多くのI型糖尿病患者への治療には従来のやり方から集約的なインシュリン療法に切り替え、児童や妊娠中の女性には輸入したインシュリン・注射を使用しました。その結果、1993年以降、1000人以上の糖尿病患者が糖尿病の自己コントロールを行えるようになりました。

2005年、スタニスラフ・グリゴロヴィッチ氏の跡を継いでプレスト州立内分泌診療所の所長になったのが息子のアルツール・グリゴロヴィッチ氏

(現所長)です。1993年グロドナ医科大学を卒業後、麻酔・蘇生医として働いていたアルツール氏は1997年にプレスト州立内分泌診療所の移動検診ラボの主任に任命されました。容易ではない移動検診の条件の中で彼は甲状腺疾患のスクリーニングを行い、超音波による生体組織穿刺吸引検査法を導入します。

2009年、プレスト州立病院では、ベラルーシで初めてとなる甲状腺内視鏡手術が行われ、その際にアルツール所長による術中の病理診断が行えるようになりました。

近年、プレスト州では糖尿病の割合が増え続けていて、ベラルーシで最も多い十万人当たり223.75人の割合です。そのなかで、プレスト州立内分泌診療所の功績は糖尿病が原因で死亡するケースを減らし続けていくことです。

プレスト州立内分泌診療所では11人の医師がいて、そのうちの6人が内分泌専門家、4人が超音波検査医、1人が研究室の診断医です。診療所の働きとしては、内分泌診断・検診治療(プレスト州内の移動検診も含める)、内分泌学におけるベラルーシ医療学術会議への積極的参加です。また診療所では伝統的に糖尿病治療に力を入れていて、糖尿病教室

というシステムの中でも患者をサポートしています。さらにはここは内分泌系の病気を予防・治療するためのセミナーや学術会議が行われる中心でもありません。

現在、プレスト、ピンスク、バラナヴィッチの町に3つの診療施設があり、プレスト州全土で35の診療室、3か所の合計で130人分の入院施設が設けられています。また州全体では70人以上の経験豊かな内分泌医師が働いていて、ベラルーシ共和国のなかでは最も充実しています。

20年前にプレスト州ストーリン地区で始めたチェルノブイリ医療支援ネットワークの移動検診に自主的に合流・参加して検診技術の習得に励んでいたのが、当時は移動検診ラボのリーダーだったアルツール医師です。彼がプレスト州の中を駆け回りながら多くの検診をすることで、日本人医師を超える検診のエキスパートとなり、父親を継ぐ形で内分泌診療所の所長となったことが我々の医療支援にとって大きな力となりました。

# 久保山菜摘チャリティーコンサート リュドミラ・ウクライインカ講演会



## 2

017年は私たちが1997年にベラルーシでの甲状腺検診活動を始めて20年となります。また、前身団体の「チエルノブイリ支援運動・九州」から「チエルノブイリ医療支援ネットワーク」へと改名し、NPO法人として新たにスタートしてから10年となります。来年5月に記念事業として、「久保山菜摘チャリティーコンサート+リュドミラ・ウクライインカ講演会」を4地域にて開催いたします。詳細は、3月発行予定の「チエルノブイリ通信」110号にてお知らせします。

### コンサート&講演会の日程(予定)

- 福島／講演会
- 東京／ビュッフエ+コンサート+講演
- 福岡／チャリティーコンサート+講演会
- 広島／ビュッフエ+コンサート+講演



#### 久保山菜摘さん・プロフィール

1992年生まれ。4歳よりピアノを始める。1998年、モスクワでの日ロ交流コンサートに参加。ドイツ・ベルリン国際スタインウェイコンクールにて第2位、聴衆賞、コンサート賞を受賞。その他、国内外での受賞多数。小学5年生のときの平和授業をきっかけに、「大好きなピアノを弾くことで、私にできることをしたい」という思いを抱き、12歳のときからチャリティーコンサートを企画。2011年4月には、ゲストに米良美一さんを招いて、「チエルノブイリ原発事故から25年…」というタイトルで、第7回目のチャリティーコンサートを開催した。

(※詳細は「チエルノブイリ通信」84号で報告)



#### Ludmila Ukrainkaさん・プロフィール

ベラルーシ共和国で生まれ育つ。甲状腺がんの告知を受けて15歳のときに甲状腺の摘出手術を受ける。術後は声帯を傷つけられたため半年間声が出ない状態が続いた。また医師に対する不信や将来への不安など心身に大きな傷を負った。こうした自身の辛い経験を、同じ境遇にある人たちのために役立てたいと考え、臨床心理士を目指す。二度の来日経験あり。2005年には出産を経験。現在は愛娘のアンナちゃんと暮らす。

## 第29回和白干潟まつりに参加しました！



11月19日(日)、福岡市東区の「和白干潟・海の広場」にて、第29回目となる和白干潟まつり(和白干潟を守る会、グリーンコープ生協ふくおか福岡東支部の共催)が開催されました。

チエルノブイリ医療支援ネットワークも活動紹介ブースを出展し、ベラルーシの福祉工房「のぞみ21」の手工芸品や支援コーヒーなどを販売させていただきました。設営時には雨が降ったものの、その後は終了まで晴天がつづき、寒い中でしたが、あたたかい食べ物や渡り鳥の観察など、盛りだくさんの内容で、楽しい一日でした！



# ミンスクの一日



田中 仁  
Hitoshi Tanaka

ベラルーシ・ミンスク在住の田中仁さんより、ベラルーシ便りが届きました。今回は、2015年にノーベル文学賞を受賞したスベトラーナ・アレクシエービッチ氏に関するレポートを寄せていただきました。

**チ** エルノブイリ原発事故から31年が過ぎたベラルーシ。当時もつとも放射能被害を受けたこの国の現状を首都ミンスクからお伝え

ていきたいと思えます。ミンスクでは10月25日に早くも初雪が降り、例年になく大寒波が予想されています。それでも笑顔でさっそうと町を歩いている人達を見ると、事故後の汚染被害や精神的ダメージはまったく残っていないかのような平和な雰囲気が漂います。はたして彼らは本当にあの悲惨なことを忘れてしまったのでしょうか？チエルノブイリ事故のことをテーマに調べていくと、ミンスクではそのことが記念碑等に刻まれて町に建てられるというよりは、資料の記録・人々の記憶として強く残されていることが分かります。今回の取材は身近なところからはじめました。自分が学ぶ現地のジャーナリスト学部で貴重な情報とチエルノブ

イリ事故に対する強い思いを職員の方々から受け取ることができました。

**ベ** ラルーシ国立大学ジャーナリスト学部が一躍有名になったのは、その卒業生でもあるスベトラーナ・アレクシエービッチさんがジャーナリストとして、そしてベラルーシ人として初めてのノーベル文学賞をとった2015年のことです。保母、歴史の先生・ドイツ語教師、報道記者として働いてきた彼女が作家として本格的に文学活動を始めたのが1975年。1997年には『チエルノブイリの祈り』未来の物語』という事故の記録を綴った本を発行します。原子炉の消火活動にあたった作業員とその家族や学者、医師、現地の住民、移民に会いに行き、実際の話を聞きながら執筆したこの作品は日本語も含め多言語に訳されています。さっそくこの本を求めてジャーナリス

上)ターミナル駅から徒歩25分。ペラルシ国立大学ジャーナリスト学部  
下)ジャーナリスト学部の講義の様子



案内してくれた司書のナターシヤ・ポルタルジツカヤさん

ト学部の図書室を訪れました。ここではアレクシ  
エービッチさんと面識のある二人の司書リユダ・  
ウシヤコヴァさんとナターシヤ・ポルタルジツカヤさ  
んが彼女に関する記録・資料をたくさん出してき  
てくれました。「1972年卒業後、アレクシエー  
ビッチさんは恩師の呼びかけで2000年に再び  
ジャーナリスト学部を訪れます。彼女はその時ま  
だ小規模だった図書館のために1000ドル(約  
10万円)の寄付をしてくれました。その寄付金で  
私達は多くの文学書を購入して閲覧室に置くこ  
とができました。…」とリユダさんは当時を振  
り返りながら『スベトラーナ・アレクシエービツ  
チ寄贈品』の印刷の入った書物を見せてしてくれま  
した。さらに著者本人によるサイン入りの『チェル  
ノブイリの祈り〜未来の物語』の本も探して  
きてくれました(※上写真中央)。チェルノブイリ  
事故のことについても時間をかけて話してくれた  
リユダさんにお礼を言うと、「いいですよ、こ  
れは私にとっても大切な時間となったのだか  
ら…。」とあたたかい返事が返ってきました。関連  
記事の切り抜きを見せてくれたナターシヤさんは

「人づきあいのいい彼女は感情豊かで笑顔いっぱい

の明るい女性でした!」と初めて会った時のアレクシ  
エービッチさんの印象を語ります。

ーベル文学賞作家アレクシエービッチさんの  
『チェルノブイリの祈り〜未来の物語』は

原子炉消火活動に真っ先に参加した英雄バシーリ・イ  
グナチエンコ氏の妻リユドミーラさんの話からはじまり  
ます。事故発生時、原子力発電所から2キロ離れたプ  
リピヤチで消防士として働いていたイグナチエンコ氏の  
作業班は即座に現場に向かいました。しかし消火活  
動中に致死量の放射線量を受けた彼は仲間と共にボ  
ルリースピリ(ウクライナ)に運ばれた後すぐにモスク  
ワの病院に搬送されます。当時妊娠中だったことを  
隠してまで病院に収容された夫のもとへ行くリユド  
ミーラさんですが、一か月も経たないうちにイグナ  
チエンコ氏は他界し、先天性心臓障害で生まれてきた  
娘は肝硬変も患い亡くなります。愛する二人の家族を  
失った過去を思い出すのはとてもつらいことでしたが、  
二度と起きてはならないこの悲劇を次の世代に伝え  
る決意をしたリユドミーラさんは、アレクシエービツ  
チさんのインタビューに応じます。現在、この英雄消防  
士の名がついた『イグナチエンコ通り』が首都ミンス



学部図書館には清水先生の記事も保管されていた



クローク係オリガ・チブリコヴァさん。いつも明るい



ジャーナリスト学部から徒歩20分。イグナチenko通り



ベラルーシの首都ミンスクの町並み

ク、ベレジノ(ミンスク州)、ブラーギン(ゴメリ州)にあり、それぞれ記念プレート(ミンスク、ベレジノ)、記念碑(ブラーギン)が置かれてあります。毎年、事故の起こった4月26日にはイグナチenko通りでチェルノブイリ原発事故犠牲者をしのぶ集会が行われます。今年(2017年)の4月26日もこの追悼集会に当時の事故消火活動作業員、ベラルーシ非常事態省の職員、若い消防士達が集まり、イグナチenko氏に敬意を表して花を添えました。ジャーナリスト学部で働いている人達のなかにも英雄イグナチenko氏の故郷(チェルノブイリ)から90キロの距離に位置する)ブラーギン地区出身者がいます。入口すぐの上着を預けるクローク係オ

リガ・チブリコヴァさんです。彼女にもチェルノブイリ事故のことについて伺ってみました。するとこのオリガさん、実は英雄イグナチenko氏の遠縁にあたること明らかになりました。オリガさんのお母さんとイグナチenko氏の母親は従姉妹だったのです。親戚にあたるイグナチenko氏の避けようのなかった死への複雑な思いを『死にゆく者は生きる者のために』と表現したオリガさん。「福島を知った時とてもショックだったし、今でも日本の皆さんのことは自分たちのことのように心配しています。」と私たちのことを気遣ってくれています。

**今** 回は身近な大学の場で先生や職員の方々に話をききましたが、その中にも彼らの家族の中にも甲状腺の症状が見られる人達があります。それが必ずしもチェルノブイリ事故が原因していると断言はされませんでした。ただ多くのベラルーシ人の心の中には今もチェルノブイリ事故の記憶が鮮明に残っているのは事実で、「原発事故のことはこれからの若い世代にも忘れえないものとして残っていくでしょう。」と今回インタビューに協力してくれた皆さんは口をそろえて言います。

田中 仁

# たくさんのご支援を ありがとうございます。

(順不同・敬称略)

浅原望樹 佐藤和子 佐藤久美 高橋武三 中島乃婦子 野中孝子 野村文子 福山知恵子 めぐみ保育園職員一同

## 【都道府県別】

- 【東京都】 1名 【愛知県】 1名 【兵庫県】 2名
- 【鳥取県】 1名 【島根県】 1名 【岡山県】 1名
- 【広島県】 3名 【山口県】 2名 【愛媛県】 1名
- 【福岡県】 17名 【熊本県】 1名 【大分県】 1名
- 【鹿児島県】 1名

計333名(匿名含む)

## ●マンスリーサポーターの皆さん

- 相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 植田清子 内野千鶴子 有働聡美 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大久保弘子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川崎清美 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 後藤宇企子 財津耐代子 財津悠子 齊藤美代子 阪口香奈子 坂口馨子 佐々野也依 佐竹早苗 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野

★年末年始の商品発送スケジュールについて★2017年12月29日(金)～2018年1月3日(水)まで休業いたします。

そのため年末年始の商品発送については、通常と異なるスケジュールにて進めさせていただきます。詳しくは事務局までお問い合わせください。

合計	372,670円
*活動支援金	328,670円
*雪だるま3号カンパ	3,000円
*東日本支援カンパ	27,000円
*おまかせカンパ	14,000円
(2017年8月～10月分の寄付内訳)	

- 沙智子 西首延子 丹羽道代 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勅子 藤田優子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山さより 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 村松知子 室屋芳乃 矢野和代 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子 渡邊真志子

計122名(匿名含む)

2017年8月1日～10月31日までに募金をしてください。同封の振込用紙の「氏名掲載」欄で、「可」の部分へ○印をしてください。ご記入をお願いします。なお郵便振替以外からのお振込み等については、許可が確認できなかったものとして掲載しておりません。募金者名の掲載を希望の場合は、お手数ですが事務局までご連絡ください。

## 皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●チエルノブイリ医療に使ってください。●会報ありがとうございます。興味をもって読ませてもらっています。●少額ですがよろしく願います。●原発反対！●チエルノブイリも福島もまだまだ解決にはほど遠いですね。●皆さまのご健康を祈念いたします。●いつもありがとうございます。福島事故6年経って子どもたちの健康被害が心配ですね。

## 募集しています

**月々** 300円からの募金で気軽に、「コツコツチエルノブイリ支援をはじめませんか？マンスリーサポーターになると毎月26日にご希望の金額がゆうちょ銀行総合口座から自動的にCMNへ寄付されます。」「毎回振り込みに行く手間を省きたい」「無理なく継続的に支援を続けたい」という方にピッタリ。お申込み・お問合せはお気軽に事務局まで！

## お知らせとお願い

**振** 込用紙は毎月同封しています。これは「思い立った時にいつでも振り込みできるように、毎月同封してほしい」というご希望があったからです。決してお振込を強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不要な方は処分をお願いいたします。

**住** 所を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付がご不要の場合は、お手数ですが事務局までその旨ご連絡ください。

## 編集後記

2017年12月と今年も早く時間が過ぎたみたいです。わたしたちは2018年もこれまで以上に医療支援活動と通信の内容の充実さを図り、そして講演会の開催を計画しております。

皆さまの応援を今後ともよろしく願っています。

(H.K)